

武者小路実篤「友情」の創作から初期の受容の検討

——読者層の創出

園 田 若 瑳

はじめに

一九一九（大正八）年十月～十二月に『大阪毎日新聞』に発表された武者小路実篤の中編小説「友情」は初出以来、全集・文庫等に継続的に収録され、現在でも流通している。「お目出たき人」「その妹」「愛と死」と並んで武者小路の代表作として紹介されることも多い。以下は一九八七（昭和六十二）年に小田切進が「武者小路実篤の文学」と題して新潮文庫『愛と死』に書き下ろした解説の一部である。

ところで、その数多い作品の中でも、『友情』と『愛と死』は長い間広く読まれ、今も若い人たちに愛読されている。日本の近代文学をつうじて、夏目漱石の『坊っ

ちゃん』、川端康成の『伊豆の踊り子』と共に最も多くの読者をもつ作品になっている。

この指摘が今日において妥当かどうかは疑問であるが、この昭和六十二年の小田切の解説における「友情」は「坊っちゃん」と「伊豆の踊り子」に匹敵する作品として特権的地位を与えられており、かつての「友情」の評価の一端を窺える。また、集英社文庫『友情・初恋』の裏表紙では、「『友情』と愛情、恋愛と失恋を描いた日本近現代文学の代表的選集小説」と「友情」を位置づける。しかし、昭和六十年代における評価が今日においても未だ有効であるのかどうか。「友情」の評価史・受容史を発表から今日まで通史的な検討の一端として、まず本論では「友情」の創作から初期の受容について考察したい。

本論では「友情」のテキスト本文と、発表後の武者小路の「友情」への言及と昭和二十年代の「友情」への評価を考察すること、武者小路が創作時点でどのような読者層を想定し、発表後どのように「友情」という作品が流布し初期の読者層を獲得したかを明らかにする。第一章で問題にするのは「友情」のテキストそれ自体、「友情」のメタレベルでの解釈の問題である。まずこの章では武者小路が「友情」の登場人物が武者小路自身と志賀直哉に極めて近い人物として描写することで、いわゆる「文壇小説」として「友情」を創作したのではないかとという仮説について取り上げる。それによって武者小路は「友情」に具体的な読者を設定しており、そこに「友情」の「想定された読者」が見て取れるのではないかというのがこの章の狙いである。第二章では「友情」が武者小路の「代表作」として特権的な地位を与えられていく時期を問題にする。これまでの先行研究では、昭和二十年代まで「友情」が評価されなかった時期だとされてきたが、一方で武者小路の認識はそれと真逆のものであった。「友情」の批評として最も影響力のある書評は昭和二十二年度の亀井勝一郎の解説文であるが、そこで亀井は「友情」を「最も健全な恋愛文学」と位置づけた。なぜこのような解説が「友情」に付せられたのか、亀井自身の思想的背景や当時の性倫理などを視野に入れてその背景について考察する。

本研究の直接的な先行研究としては江間通子「甦る「友情」——時代が押し出す力学によって構築される「読み」」（近代文

学研究）平成十六年三月）が挙げられる。同論文は「友情」が初出してから、「友情」が現代文の教科書に掲載されていた昭和四十年代までを研究範囲としている。江間の研究は「友情」の評価史の研究について先鞭をつけた。江間は「友情」が昭和二十年代以降に「清純な」恋愛小説であると解釈されているところから、昭和年間までの「友情」の評価史について問題を提起している。この先行研究については第二章で言及する。

今日まで連続的に流通し、国語教科書の「安定教材」にもなっている夏目漱石「こころ」や森鴎外「舞姫」、芥川龍之介「羅生門」、太宰治「走れメロス」などの受容史については既に多くの先行研究が発表されてきた。近年では佐野幹『山月記』はなぜ国民教材となったのか』（平成二十五年、大修館書店）、滝口明祥『太宰治ブームの系譜』（平成二十八年、ひつじ書房）、大山英樹『夏目漱石と帝国大学』（令和二年、晃洋書房）など作家・作品の受容史についての研究書が相次いで出版されている。一方で「友情」の評価の変遷について扱った先行研究は江間の論考が唯一であり、さほど注目されていない。しかし「友情」の評価史を俯瞰することで大正年間以降の文学を巡る出版状況や文化的コンテキスト、ジェンダーの問題、国語教育のあり方などが見えてくるのではないだろうか。

第一章 「友情」の創作

第一節 メタレベルの解釈を巡って——武者小路と志賀

本項では武者小路実篤「友情」について、「友情」のテクストと、そのメタレベルの問題に立ち返って二つの事を検証したい。主人公・野島は作者・武者小路と極めて近い人物造形になっているのではないか。更に、「友情」が野島の回想として書かれている設定は、「友情」が当時の文壇における一つのムーブメントであった「文壇小説」として成立するための重要な要素である。つまり本章で問いたいことは「友情」には武者小路による意図的な解釈の仕掛けがあるのではないかという点である。安藤宏は近代文学の三人称小説では当事者の一人称的なリアリティと、作中世界を客観的に俯瞰する三人称の視点をどのように折衷するかを模索する過程が、明治四十年前後まで継続していたと論じている。以下、安藤の説に沿って述べれば、三人称の語りによって作中世界を冷静に客観視しようとすれば、三人称の語りによって作中人物の内面心理を表現することが困難になり、事件の当事者としてのリアリティが失われてしまう。かといって三人称の語り手が作中人物の一人に密着しすぎれば作中世界を客観的に俯瞰する視点が失われてしまう。この二律背反の問題は二葉亭四迷が一八八八（明治二一）年に「浮雲」を発表してから明治四十年代に自然主義が台頭するまで、「文壇」において大きな問題であった^③。

「小説家小説」はこのような問題意識の中で編み出された、一つの解決方法である。小説家が主人公となり、更に小説家という職業に言及される「小説家小説」が多いことは、近代以降の日本文学の特徴の一つと言われるが、安藤は田山花袋「蒲団」（明治四十年「新世界」）に「文学者だけに、この男は自ら自分の心理を客観するだけの余裕を有つて居た」という一文が存在することを指摘し、主人公を小説家にするこの効果について、以下のように論じている。

事件の当事者でありながらそれを冷静に客観しうる、一種特異な才能を持った「小説家」を視点人物にすることにより、語り手は余分な口出しをせず、みずからの観察や説明の権限の大半をそこに委譲することが可能である。果たしてそれが十全に可能であったかどうかはさておき、少なくとも当事者性の演出と、語り手の主観の抑制とを共に実現するためにはきわめて有効な手だてであったにちがいない。言文一致による文章の平準化が急速に進んでいくこの時期にあつて、今後、あたかもそれに比例するかのように「小説家」を主人公にした小説が増えはじめるのも、おそらくはこうした事実と決して無関係ではないのである。

「友情」も小説家小説としての体裁を持つてゐることは、戸

松泉によって既に指摘されている。^③戸松は「友情」が上篇終盤まで作中人物を「彼」「野島」「大宮」と呼ぶ三人称の語りで構成されているが、上篇三十五章で「ここで自分は筆をはしる」という一文が出現したことにより、実は「友情」が野島の回想として書かれているという作中の設定が明らかになることを指摘し、次のように述べている。^④

この唐突に現れる「自分」は誰かと考えてみた時、小説内の語り手自身の介入・突出に過ぎないとか、単純に作者武者小路実篤などと片付けて終わりにする読者は、現代の解釈共同体においてはそう多くないであろう。むしろ、小説家と設定されている作中人物・野島自身と考える読者は、少なくともこの小説の語り手とは、かつての失恋経験を、後半のある時点で、一編の小説としてまとめつつある野島自身と捉えることができる。語り手の全知の視点による、三人称客観小説などとして済ますことはできない、メタ小説構造をもつ「友情」の世界が見えてくる。

戸松の指摘は「小説家小説」としての「友情」の構造について論じた唯一の先行研究であるが、その指摘は些か一面的なものに留まっている。というのは、「小説家小説」の理論を提唱した安藤によれば、「小説家小説」のもつ効果は作中世界の入

れ子構造に留まるものではないからである。^⑤

：一般に、ある一人の人間が「自分史」を書いたとしてもそれが直ちに「小説」として認知されるわけではない。一見特殊な体験が描かれているように見えながらも、それが同時に読み手にとって普遍的な価値を有しており、「小説」として今後も読みつがれるべき価値を有している、ということを示唆する機構がどうしても必要になる。その意味でも、体験の持つ意味が書き手自身の中で煮詰められ、時を経て「この小説」に成り代わっていく経緯を示すという手立ては、「小説」が独立した単体のテクストとして伝承性を主張する上で、きわめて有効な方法なのであった。

〈中略〉日常の個人を写實的に、しかも顔の见えない不特定多数の読者に提示するにあたって、いわば「あの漱石」「あの鴎外」の書いた作品である、という形の神話化は、なかば必然的な道程でもあった。こうした中で、作者を思わせる「小説家」を主人公にするという手だては、あらたなコンテクストの発信装置としてたしかに有効なものであったにちがいない。

作品内の描写に、「文学史」や「文壇」の叙述に昇華できる説話を仕込むことによって、テクストはテクスト自体が持つ内

在的な美的価値だけでなく、メタレベルの文学史的な史料としての価値をも有することになる。あるテキストが美的価値と文学史的史料としての価値を併せ持つという事態が、安藤が指摘する「単体のテキストとして伝承性」に大きく影響したことは否定できない。その伝承性を付与するために「小説家小説」という表現機構は大いに役立ったのである。では「友情」のテキストによって喚起されるメタレベルの説話とは何であるのだろうか、そしてその表現機構はなぜ仕掛けられたのだろうか。

テキストを文学史的の叙述としても見ることを可能にする要素は無数にあるが、その一つに登場人物の人物造形を実際の人物に近づけるということが考えられる。「友情」について武者小路自身は「この小説は勿論つくりもので、事實にモデルはいない」としているが、テキストを読んでいくと野島が武者小路に近い人物造形であり、また大宮のモデルが武者小路の友人であつた志賀直哉であることは明白である。

野島が武者小路自身を投影した主人公であることは作者自身の「しかし自分のいろいろの経験が、いろいろの形になつて來ているのは、『或る男』を讀んだ人にはわかると思ふ。」という言葉から視えるが、このように野島＝武者小路／大宮＝志賀の図式が成立することで「お互いに感化され、感化した。どっちかという年齢下の野島の方がより多く大宮を感化した。」（前篇第七章）という一文が野島の心情描写だけでなく、それ以上の「武者小路の志賀に対する所感」というメタレベルの価値も

発生する。

この「友情」に武者小路と志賀の關係性を見て取る解釈は批評家にも共有されており、後世の解釈にある程度の影響を与えているといえよう。以下は、白樺派文学の批評家である本多秋五が一九六五（昭和四十）年に旺文社から刊行された『友情・愛と死』に執筆した解説の一部である。

——友人 大宮が志賀直哉を彷彿とさせる点のある男性であること、実際に初めの方には、武者小路氏と志賀氏との間にあつた事実談が織り込まれていること、などについてはここに詳しくは書かない。この小説が実話でなく、つくり物語であるのはいうまでもないが、作者の眼前に志賀直哉という存在があつて、作品の緊張度を高めるのに役立ったことは断言できる。

この内容は本多が一九六六（昭和四十一年）年に『武者小路実篤集』に書き下ろした内容を本多本人が引用した形である。「実際に初めの方には、武者小路氏と志賀氏との間にあつた事実談が織り込まれていること」と言及している部分の出典が突き止められなかったため委細は不明である。大津山国夫は集英社刊行『友情・初恋』（一九九二年）で先述の本多の「友情」評にふれた上で以下のように言及している。

：実篤少年が虚構の世界で（この虚構の世界で、ということ強調しておかなければならない）二十代を迎えた姿が野島であり、野島は作者の精神的分身であつた。

：細部にわたつて志賀を「彷彿させる」し、そういう細部の合致を越えて、大宮のモラル・バックボーンのようなものは、志賀のそれをいっそう純化させたものといえよう。

本多、大津山ともに野島に武者小路を、大宮に志賀を見るところは共通しており、また「友情」にフィクショナルな恋愛小説という以上の価値を見出している点については一致している。このように本多・大津山も「友情」にメタレベルの武者小路と志賀の関係を読み取っていた。

第二節 分身の意図

安藤は「文壇」を「テクストに内包されたその指数」と定義し、小説におけるメタレベルについて以下のように指摘している。

：われわれは小説を読む際に、題材としての物語と並行して「作者」の小説家としてのふるまい——演技——を半ば無意識のうちに感受し、メタレベルに「もう一つの

物語」を読み取って共同性の根拠にしているのである。〔中略〕小説の表現機構は静態的な構造としてあるのではなく、コンテクストと響き合いながら、常に物語と物語生成にかかわる説話とが表裏する現象としてわれわれの前にあるのだともいえよう。

安藤は芥川龍之介や菊池寛を始めとした「新思潮」の作家や、白樺派の作家たちが自分や仲間の作品を引用する、または自身の周辺の起源に対する神話を作り上げていったことを論じている。

：彼らの間にはある種の默契のごときものがあり、文壇デビューにまつわる説話を互いに作り合うことによって、小説家としての「起源」を伝承の根拠にしていこうとする合意を背後にうかがうことができるのである。こうした舞台を仮構することによってはじめてそれを共有する感覚——具体的な読者——をイメージして小説を書くことが出来たのであり、この種の「楽屋裏小説」を前提に、近代の「小説」は自律的な価値の高い表現世界を階層的に構築していくことが可能になったのである。

武者小路が野島と大宮という武者小路自身と志賀を想起させる人物を主人公にした事は、当時の「文壇」に求められていた

「起源づくり」のムーブメントに沿った結果なのではないだろうか。

しかし、「友情」はあくまで虚構の作品である。武者小路と志賀に恋人を巡って三角関係になったという事実は存在しない。武者小路は「友情」の執筆によって自らの「起源」を語ることを志向したのではなく、武者小路は大正八年に既に確立していた自身と志賀のバックボーンと関係性を野島と大宮に模倣させることから出発し、そこにフィクションを構築していったのである。

武者小路がこうして「武者小路と志賀の関係」というメタレベルの事象から作品を形成していったのは、そうすることで安藤の言う「具体的な読者」、つまり期待する読者を想定することが出来たからであろう。「友情」を享受する読者は武者小路と志賀が古い盟友であるということを知った上で武者小路の作品を読む者であると予期していた。ここに武者小路が「友情」の読者に期待していたものを見て取れる。

第二章 「友情」のパラダイム

第一節 「代表作」言説の発生

大正年間に雑誌と新聞で発達した月評・年評⁽⁸⁾や書評などでは、初出以来、一九四七（昭和二十二）年まで「友情」に対する反応は確認できない。江間はこの事実を重要視し、更に武者小路が一九五五（昭和三十）年の回想で「消えていった」と思ったも

の」と形容したことを「友情」が評価されなかった⁽⁹⁾ことの根拠としている。江間はこの当時の批評家の言説、文壇⁽¹⁰⁾の状況など多角的な視点で調査し、言論空間で評価されなかった要因について考察しているが、江間の論考では、大正六年頃から「文壇」内では「作品」を「作家」の「生活態度」「人格」から評価し「作家」が語られていく風潮があったことを山本芳明の論を引用し論じている。⁽¹¹⁾ここで江間は武者小路自身には「新しき村」という共生の理想社会の実践を試みる「生活態度」が、戯曲家⁽¹²⁾という評価以上に大きな評価軸として働いていたと指摘する。⁽¹³⁾

：戯曲で評価されていた（実篤）、小説であっても「幸福者」など宗教性をもった作品、「新しき村」の「生活態度」により「人格」が現れている作品が良い作品として位置づけられていくのである。その中で「友情」はこのパラダイムから完全にはみ出た（実篤）のイメージには適さない作品として位置づけられていったのである。⁽¹⁴⁾

しかし、雑誌に発表された月評を始めとする言説空間のみが作品の評価を形作るわけではない。ここでは「友情」が初出して以降の武者小路の発言を参照し、「友情」の最初期の評価を検討したい。

武者小路が自序以外で「友情」について言及したのは、管見のかぎり一九四〇（昭和十五年）年十一月に刊行された『白樺叢書 武者小路実篤集』の「後書き」が最初である。この後書きの「モデルはない。事実もない。しかしこんなことは作者は黙っている方がいゝのかも知れない」¹⁸は解説文などに頻繁に引用されている¹⁹。そこで武者小路は「友情」について以下のように記述している²⁰。

：一つは友情で、岩波本に出てゐるもので、僕のもので一番広く読まれてゐるものだ。もう随分前にかいたものだが、それでもあと二つ（引用者注…「お目出たき人」、「第二の母」）よりは新しい。三つともまだ白樺が出てゐる時分の作である。

「僕のものでは一番広く読まれてゐるものだ。」という武者小路自身の認識は、既にこの昭和十五年時点からあったのである。この選集に「友情」の登場以前から武者小路が自身の代表作として挙げていた「愛慾」²¹が採録されていなかった事情も考慮するべきであるが、この時期には、既に武者小路自身にとって最も世間に知られた自身の作品は「愛慾」ではなく「友情」であると認識が転換していた。

このように「友情」は決して無視された作品ではなく、武者小路自身も「僕のものでは一番広く読まれてゐるものだ」と発

言するほど受容された作品であった。初出から「友情」の刊行状況を調べると、一九二〇（大正九）年に以文社から初刊（単行本）が販売されてから、翌年までに五版を出来し、同年五月には叢文閣より『自序 友情』が発刊されている。また一九二三（大正十二）年に文藝社より刊行された『武者小路実篤全集 第六巻』を皮切りに昭和十年までに四冊の選集に収録されている。武者小路が言及した岩波文庫「友情」が出版されたのは一九三二（昭和七）年であり、定価二十銭という廉価で販売された。以文社刊行の初刊本が定価二円三十銭であったことを考えると幅広い読者層が文庫という新たな媒体によって廉価に「友情」を受容できた状況が指摘できよう。

第一章で述べたように、武者小路は「友情」を『文壇小説』として構想していた。しかし、岩波文庫という大衆に影響力のある媒体で「友情」が刊行されたことによって、武者小路が想定していた、武者小路と志賀の関係性を知る読者の、枠を超えた読者層を獲得していた。

第二節 亀井勝一郎の「友情」評

亀井勝一郎の「友情」評が発表された昭和一九四七年（昭和二十二年）年、昭和末は「友情」の評価史を考察する上でかなり重要な時期である。本章では昭和年間における「友情」の典型的評価の定着について考察する。

昭和二十二年に刊行された「友情」の新潮文庫版に書き下ろ

された亀井勝一郎の解説は、「友情」に対して書かれた書評の中で最も影響力が強いものである。

かなり長いが以下に亀井の書評を引用しよう。⁽²³⁾（傍線部引用者）

「友情」は武者小路氏の数多い作品の中でも、最も長いあひだ愛読されてきたものである。大正九年一月の完成であるから、実際に執筆されたのは、おそらく前年の暮あたりであらうと思ふ。〈原文ママ〉作者三十六歳の作で、それから二十数年間といふもの、毎年のやうに版を重ねてきたのだから、生命は長くすでに一種の古典と云つてもいい。

〈中略〉

大正八年前後は、氏の多面的な活動が始つた頃で、「幸福者」「耶蘇」などの代表作が生れ、また新しき村の創立（大正七年）、「白樺」十周年記念（大正八年）などが催された。青春の力が昂り昂つて様々に開花したやうな時代で、おそらく氏の生涯においても、幾たびもふりかへられ、またそこから絶えず生命を汲む泉のごとき時代であつたと思ふ。後年の、たとへば「愛と死」「幸福な家族」などの恋愛文学は、「友情」のより成熟した段階におけるヴァリエーションである。

「友情」は最も健全な恋愛文学である。〈中略〉日本に

は愛慾と恋愛遊戯の作は多いが、青春をこれほど全的にとらへたものは意外に少い。青春時代に誰でもぶつかる問題とは、云ふまでもなく恋愛と友情の問題である。この二つは切り離すことが出来ない。云はばいかに生きるかといふ根本の問ひからくる二つのさまよへるすがたに他ならない。

〈中略〉

同時に文体は非常に簡潔で明るい。どんなに複雑な思想をも、のびやかに明るく、平坦にかく、だから深刻好きの近代的青年には好れないことがある。あまりやさしいので物らぬと云つた人もある。決してやさしくはないのだ。「友情」をみると、実に多様な糸がはりめぐらされ、きめのこまかい、神経のよくゆきとどいた作品であることがわかる。そして相当にしつこい。しかも全体として清楚で明るい、これが武者小路氏の独自の風格である。作柄は大きい。

「友情」は、恋愛、結婚、友情、芸術、社会問題、それをめぐる様々の感情を描いてゐるが、この一切を含めて貫く主人公の祈りに、とくに留意しなければなるまい。

〈中略〉

近來の恋愛小説、むしろ情痴小説は、肉体を露骨に描くことを特色としてゐるが、これは決して無視して、ものではないが、しかし今まで述べたやうな全人性の喪

失は何と云つても覆ふわけにゆかない。

或る意味では近代人共通の悲しさであるが、それだけに恋愛における全人性の快復は今の我々のつよい念願である。武者小路氏の全作品はこの点で一つの範たるべきものである。

江間はこの亀井の書評について、

この解説では「一種の古典」として「友情」が位置づけられている。ここで重要なのは亀井のこの言説は現在の評価に通ずる「友情」を、初めてはつきりとした形で位置づけたものということである。実際に以後、〈青春〉を描く〈実篤〉が機能していくことになる。

と解説し、また亀井自身の恋愛観と「友情」に描かれた「純粋な」恋愛との結合を論じている。²⁴⁾武者小路が「誰もほめない、誰も何とも言はない」と回想した「友情」は、亀井の評論をきっかけとして、言説空間でも再評価が行われたのである。亀井が先述の新潮文庫での「友情」評で「青年をとらへるものは青春の書であつて、これは題材や時勢によつて動かされるものではない。」と語るように、ここで「友情」は「青春」を送る青少年の説むべき小説として位置づけられたのである。江間は「亀井のこの言説は現在の評価に通ずる「友情」を、初めてはつきりとした形で位置づけたもの」と指摘しているが、ここで「友

情」は青少年という読者を手に入れたのである。

だがこれらの亀井の論の根底には、亀井自身の既成の価値観があつたことが指摘できる。亀井が発表した「青春・人生・読書」では「青春の五つの課題」に「宗教の問題」、「恋愛と性」、「家と世代」、「現代社会をいかに改革したらよいか」、「生きる、死ぬの「死」の問題」を挙げている。このうち、亀井は性と恋愛についての問題に以下のように言及する。

現代の我々は、恋愛とかセックスの問題を極めてどぎつく、露骨に、むしろ性的な興味の面からのみ考へがちであるが、もつと本質的に考えると、これは根本においては思想の問題につながってくる。第一にお話した信仰・宗教問題についてつながつてくるといふことが重要である。

〈中略〉

なぜ、恋愛と性の問題が、宗教の対象となるかといふと、今指摘したやうに罪悪感といふものがそこにかからんできるからであり、しかもこの罪悪感こそ、宗教のもつもつとも大きな対象となるからである。…

亀井の恋愛に対する認識は、宗教の問題と切り離せないものであつた。

恋愛とか性の問題を、もう一度宗教の問題に結びつけ

て考へる必要があるといふのは、さうでない限り、その実体が見失はれると私は思ふからである。つまり宗教の問題に結びつけた時に、恋愛や性は矛盾した形で、するどくその実体を現はすといつゝ、のではなからうか。

ここで、亀井が「友情」の主題を「祈り」としたことを思い出したい。「……この一切を含めて貫く主人公の祈りに、とくに留意しなければなるまい。「幸福者」「耶蘇」などにもうかがはれるが、この時期の武者小路氏はかなり宗教的である。」と論じた亀井の思想が、「友情」論に表象されていると考えるべきだろう。

ここでもう一つ浮かび上がる疑問として、従来の亀井の恋愛観と延長線上にあるとはいへ、なぜ昭和二十二年になって「友情」が評価されたのだろうか。これには当時の性道徳や男女交際に関する社会的言説の影響が考えられる。昭和二十二年一月に『婦人公論』に対談「結婚前の交際」が掲載された。この対談は原奎一郎、眞木ゆき、蘆原英了⁽²⁶⁾と記者の計四名が参加したものである。近頃の性風俗の乱れを憂慮する記者と、若者を擁護する他三名との主張が対立する構造になっている。

蘆原 最近、日本の娘さんたちがだらしないといふやうな聲がずるぶんあるのですけど、考へてみると彼女たちは、戦争前には十二三だった。そして徴用だとか學校

工場とかそんなふうに通いつて、満足に勉強もしなかつた。そこで戦争が終りましたからいろいろなことを知らないといつても無理がないと思ふのです。(中略)

原 (中略) ……いろいろ男の人とつき合つてゐるのを傍で見て、どうも僕は、近頃の娘さんのだらしないといふ説には、たださういふことが非常に目について來たといふだけで、實際にどこまでひどくなつてゐるかといふことは疑はしいのではないかと思ふのです。

亀井が「友情」を「清純な恋愛小説」と位置づけなければいけなかつた背景には、こうした昭和二十年代の「性風俗の乱れ」という言説があつた。上記の対談でも問題されているように、男女の交際について、特に女性の性道徳が乱れているという前提の元、どうそれを教育していくかが社会問題として問われていた。亀井の「……しかしこの小説では、その点はおもてにあらはれず、プラトニック・ラブの形をとつてゐる。」「云はば、全人的なものとして恋愛が語られてゐるのであつて、「友情」もこの意味でプラトニック・ラブなのである。」とわざわざプラトニック・ラブの語を繰り返し持ち出して「友情」を語らねばならなかつた理由がここから推察できる。

藤井淑禎は『純愛の精神誌―昭和三十年代の青春を読む―』で武者小路の『人生論』と亀井の昭和三十年代の思想について論究している。

ここで注意されなくてはならないのは、昭和三十年代に復活した武者小路の『人生論』が初めて刊行されたのも、亀井の思想的基盤が築かれたのも、いずれも昭和十年代初頭であったという事実である。昭和十年代初頭の精神がそのまま昭和三十年代に通用してしまうというのは、一見奇妙なことのようにも思われるけれども、むしろ戦後の道徳の混乱期を経て、そこからの回復をはかろうとした時、準拠すべきものとして浮上してきたのが昭和戦前期の精神であったと考えれば、わかりやすい。(後略)

藤井は昭和三十年代の武者小路と亀井の思想は戦前期から戦後期まで連続性を持ったものとして捉えるべきだとしている。更に藤井はその昭和三十年代の亀井の言説について、

同志性、求道性つまりは友情について貫かれた恋愛。生殖という面のほかに、ともに向上するという点をも強調していた武者小路の恋愛観とくらべても、亀井の説く恋愛論の独自さはまぎれがないし、同時代の執筆ということもあって時代への順応性という点でも(筆者注——武者小路の恋愛観と比べて)数段まさっていたことは疑いなさそうだ。

と指摘している。「友情」は性道徳的教育という点において格好の教育的価値を持つものとされ、昭和二十年代の社会の要請に基づいて評価されたのである。

おわりに

本論では今日において武者小路の代表作とされる「友情」の創作から昭和二十年代までの受容について検討した。武者小路は「友情」を創作する上で、主人公野島と大宮の人物造形を意図的に自身と志賀に引きつけており、その武者小路の創作意図は後年の批評においても継承されていた。こうした「友情」の人物造形の背景には当時の文壇における「起源づくり」のムーブメントがあり、「友情」には武者小路と志賀の関係性を読み取ることのできる意図的な仕掛けがあった。「友情」は昭和二十年まで無視されてきた作品と先行研究ではされてきたが、実際には「友情」は初期から岩波文庫での刊行によって幅広い読者層を得ており、その評価はそれまで武者小路の代表作とされてきた「愛慾」を上回るものであった。その後昭和二十二年に発表された亀井勝一郎の「友情」評は「友情」を純愛な恋愛と結びつけるものであったが、この書評が書かれた背景には戦後社会で若者の性倫理の退廃が社会問題となっていたことが指摘できる。

今後の課題として、「友情」は昭和三十年代以降当時の女生を対象とした読書アンケートで取り上げられ、女学生という

新たな読者層を獲得していたことが視える。女学生の次に「友情」の主な読者層となったのは「友情」を児童書のジャンルで受容した児童であった。この昭和三十年代～四十年代の受容について当時の出版状況などを参照しながら検討したい。更に「友情」は昭和三十年代～五十年代にかけて秀英出版（収録は昭和三十八年）と実教出版（収録は昭和四十七年～昭和五十三年、改訂三回）が刊行した現代文の国語教科書に収録された。教育現場における「友情」の立ち位置、並びに「友情」に求められた教育意図について史料を参照しつつ検討したい。その後平成年間以降、「友情」の出版不況や性道德教育の衰退などの影響により出版刊行は激減するが、ライトノベルにおける翻案小説が登場するなど、それまで見られなかった新たな「友情」受容が視えるため、こちらも考察の対象としたい。

注

- (1) 本稿で参照したのは、集英社文庫『友情・初恋』一九九二（平成四）年一刷、一九九八（平成十）年五刷。
(2) 安藤宏「第一章「小説家」という機構」『近代文学の表現機構』岩波書店、二〇二二（平成二十四）年。
(3) 同上。最終的にこの問題は、〈無人称の語り手〉とも言うべき、自在に登場人物に密着し、時に作中世界を統括する視点を打ち出す第三者（ただし普通は抑制的にふるまい、読者からその存在が意識されることは少ない）を語り手に据えることで解決が図られ

ていると安藤は論じる。

- (4) 戸松泉「小説家小説」としての「趣味の遺産」——自己顕彰する語り手「余」の物語言説——「文学 九巻五号」岩波書店、二〇〇八（平成二〇年）年 一二七頁。
(5) 同上 一二七頁。

- (6) 安藤宏「第六章 表現機構としての「文壇」」『近代文学の表現機構』岩波書店、二〇二二（平成二十四）年 六十六頁。

- (7) 以下、「友情」のテキストから大宮についての情報を書き出す。大宮は彼が来たのを喜んだ。そして今まで読んでゐた内村さん（引用者注・内村鑑三）の本などを見せた。大宮は内村さんのものを愛読していた。

〈上篇第四章〉

大宮はいつたいに運動家だった。テニスもうまかつたが、ピンポンは仲間では類がなかった。もう四、五年はまるでよしていたが。

〈上篇第五章〉

ある時大宮が、父と議論して、どうしても文学をやると言い切ったために、もう少しで勘当されたかけた時、野島は本気で、大宮が生活難に苦しんだら、自分ができるだけ助けようと思つた。

〈上篇第七章〉

私はここでもう一つ白状いたします。それは私はあなたのお家の前を通つた時、お家の立派なのにおどろいたことです。し

かし私を虚栄心の強い女とは思わないでください。

〈下篇第八章〉

- (8) 宗像和重「解説——大正期の「文壇」と「文藝時評」」宗像和重編『文藝時評大系 大正篇 一卷』ゆまに書房、平成十九年 五二六頁。

- (9) 宗像和重編『文藝時評大系 大正篇 別巻(索引)』ゆまに書房、平成十九年 八十七頁・八十九頁。

- (10) 江間通子「甦る「友情」——時代が押し出す力学によって構築される「読み」」『近代文学研究』平成十六年三月。

- (11) 江間は「文壇」の概念について論文中でははっきりと定義していないが、安藤宏によれば文壇は作家同士が自身と同人たちの作品や出来事、特に作家としての起源について引用し合う事によって作家たちが形成したテキストに内包されたコミュニティと論じている。(安藤宏「第六章 表現機構としての「文壇」」『近代小説の表現機構』岩波書店、平成二十四年) 一方で宗像は文壇を大正年間に発達した雑誌・新聞などで先月に発表された作品を批評する「月評」欄によって形成されたとしている。(前掲十)

- (12) 前掲十八 十五頁。

- (13) 江間が参照している論考は山本芳明「大正六年——文壇のパラダイム・チェンジ」『『未発選書第九巻』』文学者はつくられる』ひつじ書房、平成十二年。

- (14) 芥川龍之介の著名な文学批評に「大正八年の文芸界」(大正八年十二月五日、大阪毎日新聞社・東京毎日新聞社編『毎日年鑑』(大

正九年版)がある この批評では白樺派の項目も立っているが、芥川は武者小路を白樺派の項目の最初に言及し、大正八年の武者小路について以下のように述べている。

(一) 自樺派 武者小路実篤氏は本年度に至つて、愈作家としてより社会改革家として活動する事になつてしまつた。従つて実篤氏の作品として、多少とも文壇に反響を喚起した応のは、「へんな原稿」の一篇に過ぎない。が、これも小説と云ふよりは、寧ろ感想に属するべきもので、「その妹」の作家たる氏の芸術的天業を訪徳とさせるに足らなかつたのは遺憾である。予は寧ろ同様の意味に於ても、「白樺」に連載された氏の長編「幸福者」の軍厚朴模なのを推したいと思ふ。

芥川はかねてより武者小路を評価していた作家の一人であるが、右の批評では武者小路が新しき村運動に着手したことに否定的な見解を示している。

- (15) 後述の昭和一五年の「後書き」『白樺叢書 武者小路実篤集』では「僕は自分を小説家とは思つていない。むしろ戯曲家だと思つてゐる。」と語っている。

- (16) 前掲十八 十五頁。

- (17) 同上 十九頁。

- (18) 武者小路実篤「後書き」『白樺叢書 武者小路実篤集』河出書房、昭和十五年 四二六頁。

- (19) この問題については本稿の補論「補論 武者小路実篤「友情」のメタレベル」を参照。

- (20) 同上。
- (21) 『明治大正文学全集』（昭和三年、春陽堂）。
- (22) ただし、第五版は以文社ではなく下出書店から刊行されている。
- (23) 引用は亀井勝一郎『亀井勝一郎全集 補卷二』講談社、昭和四十八年 十六頁・十九頁による。初出は武者小路実篤『友情（新潮文庫）』新潮社、昭和二十二年。
- (24) 前掲十二 二十一頁。
- (25) 同上 二十二頁。
- (26) 蘆原英了 あしはらえいりょう（一九〇七—一九八二）昭和時代の音楽・舞踊評論家。明治40年1月9日生まれ。芦原義信の兄。昭和七年フランスに留学、帰国後シャンソンを中心にバレエ、演劇の紹介、評論活動をおこなう。戦後「婦人公論」編集長。三十七年フランス政府より芸術文化勲章をおくられる。昭和56年3月2日死去。74歳。滋賀県出身。慶大卒。本名は敏信。著作に「巴里（パリ）のシャンソン」など。Japanknowledge 日本人名大辞典 令和2年6月22日閲覧。
- (27) 藤井淑慎『純愛の精神誌—昭和三十年代の青春を読む—』七十一頁・七十二頁。
- (28) 筆者の片手落ちではあるが、本稿では史料収集において秀英出版から刊行された『国語 三』（昭和三十二年）と『国語現代編 一』（昭和38年）は現物を確認できなかったため、考察するのは実教出版から刊行された三冊と指導書二冊となる。

（そのだ・わかさ／本学博士前期課程）